

<論文>

牧会カウンセリングにおけるACT応用に関する試論

早坂文彦

はじめに——新しい牧会カウンセリングの構築を目指して——

目覚ましい発展を遂げている心理学諸分野の諸成果が、キリスト教会の牧会現場において応用されるようになって久しい。しかし果たして、本来心理学とは目的も思惟の方法も異にする牧会実践が心理学諸分野の知見を無批判的に応用することは妥当なことであろうか。応用するとすればどのような仕方が妥当であろうか。W. H. ウィリモンによれば、牧会活動の方法は、聖礼典中心型から、「個人を対象とした心理学主導型のテクニック」¹へ移行している。実際、医療モデルの導入により、今日の牧会活動の実践は、心理学主導の観点を積極的に取り入れるようになっているが、心理学導入の神学的根拠づけが十分には構築されていないままである²。本稿は、心理学諸分野との関連で牧会の再定義を最初に試み、牧会の実践現場における従来の臨床心理学の応用例を展望し検証する。次に、近年わが国でも有望な心理療法として導入されつつあるACT (Acceptance and Commitment Therapy)³を取り上げ、その限界を踏まえつつ、これを牧会現場に応用することの有効性を考察する。

1. 牧会とは何か

牧会 (Pastoral Care) は、プロテスタントおよび正教会における牧師・司祭の職務——「ミニストリー」(Ministry) と通常呼ばれる——の一つであり、人間の魂への配慮に関わる働きである。カトリック教会および聖公会では、これに相当する言い方は「司牧」である。「牧会」という言い方は、事柄の本質上、カトリック教会や聖公会における「司牧」という概念を排除するものではない。

山野繁子が指摘するように、人間の集団でもある教会現場における牧会には、確かに「会衆形成」という教会政治的な側面があることは否めない⁴。更にそれは協働的牧会に備えさせる

¹ W. H. ウィリモン著、越川弘英・坂本清音共訳『牧師—その神学と実践』、新教出版社、2007年、259頁。

² 同上、260頁。

³ ACTに関する包括的介绍と臨床の場における実践例については下記を参照。園田順一「ACTとは何か」『吉備国際大学臨床心理士相談研究所紀要』(第7号、2010年、45-50頁)。

⁴ 山野繁子「会衆と共に旅する者として」、『福音と世界7月号』、新教出版社、2004年、22-25頁。

態勢作りの一環と見なすならば、必要不可欠な政治的戦術でもある⁵。しかしながら、戸田伊助が「牧魂」という造語を提案するように⁶、牧会とは個人の魂に係るものである。E.トゥルナイゼン（1888-1974年）も、牧会を、神の言に全権をゆだねた場として理解されている説教と聖礼典において語られる神の言に付随する対話としての機能を果たすものとし、これを個人にいかにつたえるかが牧会の中心的課題であるとした⁷。牧会は、生の全領域における神の支配を告知する営みとして個人に向けられるものであり、この神の言に対して応答を求める問い直しを意味する⁸。ではその牧会において、個人の心に何が起こることが期せられているのであろうか。

齋藤友紀雄は、かつて米国の牧会がそうであるように、牧会をライフサイクルにおける危機への対応、すなわち、「危機カウンセリング」と位置づける。しかし、これだけでは一般のセラピストのなすところと変わりが無い。確かに齋藤は、危機が回心や新生に通じることを認め、「人間の思いを越えた次元に属する」こととするが、これを深く掘り下げて論じることはしない⁹。山本将信は、人間存在を支える信頼、信仰、希望、愛、自由、誇りを回復する役割を牧会に期待する¹⁰。これらの価値は、生きることの重さ、深さ、尊さを実感させる契機となる。しかし、この回復は、神の霊／神の言が生きて働く出来事であって、概念化によるものではないであろう。牧会は、神と共にある人間存在の全体性を回復することに奉仕する働きだからである。ハワードJ.クラインベルは、牧会の目的を欲求の充足とみなし、その中に神との関係の回復を含める¹¹。しかし、彼は、人間は罪ある状態に置かれているがゆえに、これを求めないという事実を看過している。彼は、神からの疎外としての罪の克服という神学的問題を論じているが、その克服を本来それとは排他的関係にあるところの人間関係における欲求充足と同等のものとする。彼の論法には、神人関係を対人関係に役立てるための道具とする主客転倒に容易に陥っていく危険がある。

D. ボンヘッファー（1906-1945年）は、牧会の目的を、服従への抵抗としての罪を克服することと規定する¹²。窪寺俊之は、『創世記』2章7節を解釈し、牧会の目的を人間が神から存在

⁵ E. オーツ著、近藤裕訳『現代牧師論——牧会心理学序説——』、ヨルダン社、1968年、22頁。

⁶ 戸田伊助「『牧会』か『牧魂』か」、上掲雑誌（『福音と世界7月号』）、16-21頁。

⁷ E. トゥルナイゼン著、加藤常昭訳『牧会学——慰めの対話』（日本基督教団出版部、1961年再版）、13頁以下、130頁。

⁸ 同上、146-147頁。

⁹ 齋藤友紀雄「精神の危機と牧会」『心の病とその救い』、富坂キリスト教センター編、新教出版社、1991年、140-160頁。

¹⁰ 山本将信「信徒と牧師の対話 悪霊につかれたゲラサ人をめぐって」、前掲書、161-183頁。

¹¹ ハワード・J・クラインベル著、佐藤陽二訳『牧会カウンセリングの基礎理論と実際』、聖文舎、1980年、24-28頁。

¹² D. ボンヘッファー著、森野善右衛門訳『説教と牧会』、新教出版社、1975年、111-142頁。

と意味と自己を与えられることにあるとする¹³。E. トゥルナイゼンも同箇所を引き合いに出し、この「神の息」が宿る存在として人間を回復すること、すなわち、魂及び肉体として罪の中に置かれている人間が「神の息」——「息」は「霊」の意味も同時に含む——によって生きる姿を回復させることが牧会の務めであるとする¹⁴。牧会は罪の赦しを伝える働きであり、人々をして、心理学であれ、法律であれ、道徳であれ、社会文化の言葉であれ、自らを救うように語りかける人間の言葉に暫定性・相対性の一線を引かせしめることにより、それらの言葉へのとらわれから引き離し、一切の自己義認の重荷とその取り扱いを十字架のみ手に委ねる決断へと導き、そこから新たな意欲と行為を生じさせる。牧会者もまた、悔い改めの呼びかけを、聖霊の働きの中で、従って祈りの中で行なうことになる¹⁵。E. H. ピーターソンもまた¹⁶、牧師の務めは人々を神の言に応答する生へと導き入れることであるとして同じ線をなぞる。

従って、牧会とは、礼典で語られる神の言の個人に対する語り直しと総括できよう。その目的は、人間の欲求充足ではなく、人々を生ける神との交わりに連れ戻し、その交わりを保ち、支え、成長させることにある。牧会の業そのものも神の主権の下で行われる。それではその神の業としての牧会に牧会者はどのように参与することになるのであろうか。

2. 牧会の実践としての霊的指導

来談者も牧会者も神の言葉に服する出来事であるという、この一事が見失われるならば、両者の関係は容易に上下関係に陥らざるを得ない。三永恭平（1920-2009年）は牧会者の資質を、信仰の人間観や世界観を理論的に構築し健全なパーソナリティと牧会者としてのアイデンティティを持つこととする¹⁷。しかし、こうした人間性を牧会の基盤に据えることは、自らを神の愛の代理（存在の類比）となす僭越と相まって、敬虔なそぶりをする牧会者の傲慢に墮していかざるを得ないのではないか。こうした弊害を除くために、プロテスタントがローマ・カトリックの中に置き去りにしてきた霊的指導の復権が目されている。上述のトゥルナイゼン¹⁸もボンヘッファーも¹⁹、霊的指導を律法的教導に墮したものとしてこれに懐疑的である。しかし、

¹³ 窪寺俊之「牧会カウンセリングの新たな可能性を探る」『福音主義神学第33号』、日本福音主義学会発行、2002年、59-76頁。

¹⁴ E. トゥルナイゼン、上掲書、注7、59-78頁。

¹⁵ 同上、140-219頁。

¹⁶ E. H. ピーターソン著、越川弘英訳『牧会者の神学——祈り・聖書理解・霊的導き』（日本基督教団出版局、2011年）、86頁。

¹⁷ 三永恭平「魂への配慮といやしの歴史的展望」（上掲書『心の病とその救い』所収、117-137頁）、及び、同『こころを聴く——牧会カウンセリング読本』、日本基督教団出版局、1986年、253-260頁。

¹⁸ E. トゥルナイゼン、上掲書、59-78頁。

¹⁹ D. ボンヘッファー、上掲書、111頁。

ローマ・カトリック教会によって保持されてきた本来の靈的指導は、プロテスタント的に矮小化された律法的教導などではなかった。それはむしろ、あらゆる執着から自由になる「偏らない心」(indifference)、すなわち、マインドフルな²⁰神との交わりへの招きである²¹。

E.H. ピーターソンは、こうした神との人格的な呼応関係に人々を導き入れる手段として、祈りと聖書を読むことに加えて靈的指導の復権を提案する²²。彼によれば、自己への気遣いから離れ、万事に神の介入を見、「生きた口伝承」に引き入れられる sacrament に類似した体験へと導く靈性の指導こそが牧会の中心事である²³。しかし同時に靈的指導は、神に代わって何事かを為すことではない。靈的指導者は、神の業として認識されるべき信仰の生成——キリストがその人の内に形成されること²⁴——を観察する証人としての特権を持つが、あらかじめその道筋を知ることではできない²⁵。靈的指導の再発見を唱えるウィリモンも、ピーターソンと同様の見解を表明し、牧会の本質は、信徒の欲求を福音に向けて整えさせることにあるだけではなく、牧師が具体的な生の状況の中で福音を学ぶことにあり、その意味で互恵的なものであるとしている²⁶。牧会の中心的事柄をこのように規定するならば、靈的指導において牧会者の資質として求められるものは、カルヴァン(1509-1564年)の『キリスト教綱要』(第二卷)の用語で言えば、「神に対しての人間の空虚化」、K.バルトが神の前に立たされる人間のあり方とした「謙遜の従順」、宗教哲学者ティリッヒ(1886-1965年)が『存在への勇気』(The Courage to Be)において提示した「透明化」——存在自体(Being-itself)に自己を開くこと——などで言い表されている事柄と符合する²⁷。

これらの見解を踏まえれば、牧会とは、牧会者が魂に対してマインドフルな気付きへの道案内をなしつつ、聖霊の導きのもとで、すなわち、祈りの中で、神が歩み寄り、拙い道案内を用いてくださることを待ち受ける靈的指導である。詩編27編14節などの言葉で言えば、それは「主を待ち望む」姿勢であると言えるだろう。この待望の中で、人間が生ける神との交わりの中に取り戻されるという出来事が起こるならば、牧会者になるということは、まさに神の側からの出来事の証人となることに他ならない。魂は、罪に由来する思考や感情をキリストの赦し

²⁰ マインドフルネスについては、後述、14頁参照。

²¹ ホセ・ミゲル・バラ訳『聖イグナチオ・デ・ロヨラ 靈操』(新世社、1997年)、51頁、及び、Fleming, D. L., S. J., *Draw Me into Your Friendship: A Literal Translation and A Contemporary Reading of the Spiritual Exercises* (Saint Louis: The Institute of Jesuit Sources, 1996), p.127.

²² E. H. ピーターソン、上掲書、187-238頁。

²³ 同上、215-219頁。

²⁴ ガラテヤの信徒への手紙2章20節、フィリピの信徒への手紙1章21節参照。

²⁵ E. H. ピーターソン、上掲書、229-230頁。

²⁶ W. H. ウィリモン、上掲書、262-263頁。

²⁷ 手束正昭「パウル・ティリヒの義認論——その今日的意義」『神学研究第20号』、関西学院大学神学研究会発行、1972年、152頁。

に委ね、そこに安全な場所を見出し、「今ここ」で与えられる使命に生きるように導かれる。これはひとり神の主権的業であり、霊的指導としての牧会には、人間の限界にとどまる自己抑制が求められる。では、このような魂の道案内としての牧会に現代心理学はどのような仕方でも貢献し得るであろうか。

3. 牧会カウンセリング

牧会カウンセリングはキリスト教会固有の働きであるが、一般社会のニーズに位置づけることで、その存在意義を確立する試みが二つの局面でなされてきた。一つは牧師による危機介入、他は、危機介入と連動する仕方での専門家へ橋渡しである。上述の齋藤は、牧会カウンセリングをライフサイクルにおける危機介入ととらえ、心の「平衡」を保つことを援助するものと位置づけた²⁸。この場合、スピリチュアルな終末期カウンセリングも一般の宗教的ニーズへの貢献として牧会カウンセリングの範疇とされる²⁹。異文化への適応をめぐる牧会カウンセリングも社会的ニーズへの応答である³⁰。牧会カウンセリング研究者、西垣二一は、家族の変遷に対応する牧師による家族療法への参与は牧会的主導性、牧会的権威、牧会的影響力（プレゼンス）のゆえに治療促進的であるとす³¹。これらはいずれも、一般の心理療法の隆盛の中で、牧会カウンセリングに一定の意義と有効性を見出そうとする試みである。しかしながら、牧会カウンセリングは、第一義的には人間の状況からの要請に対する応答ではなく、神の委託に基づいて教会の働きに仕えることであり、病者や危機的状況にある人々のみならず、健康を自負する人々をも対象とする牧会の一形態である。順調な生を謳歌している人々の成功の陰に横たわる信仰の危機もまた、牧会の対象なのである³²。

危機介入として牧会カウンセリングを位置付けた場合、深刻な状況や重篤な精神疾患が見られるときに、他の専門家への照会（リフェラル）が考慮されることになる³³。その場合、分業と連携には困難が伴う。分業においては罪の問題と病状が簡単には分離できないという限界があり、また連携に関しては専門家が宗教的アプローチを理解しないという問題がある。リフェ

²⁸ 齋藤友紀雄、上掲論文、143-149頁。

²⁹ 窪寺俊之、上掲論文、及び、樋口和彦「牧会学」『総説実践神学』、神田健次、関田寛雄、森野善右衛門編、日本基督教団出版局、1989年、176-182頁。

³⁰ 才藤千津子「1980年代以降におけるプロテスタント牧会神学——3つのアプローチ——」『同志社女子大学総合文化研究所紀要』、第30巻、2013年、63-76頁。

³¹ 西垣二一『牧会カウンセリングをめぐる諸問題』、キリスト教新聞社、2000年。

³² ウィリモン、上掲書、273-274頁。

³³ これについては、ウィリモン（上掲書、264-265頁）、三永恭平（上掲論文、135-136頁）、齋藤友紀雄（上掲論文、156頁）、山本将信（上掲論文、179-181頁）、H.J. クラインベル（上掲書、238-255頁）らの各論考を参照。

ラルと連携が重要なのは言うまでもないが、カウンセリングに従事する牧師の職務には、当事者またはクライアントと専門家との橋渡しという単なる「つなぎ」の役割を越えた固有の目的とアプローチがあってしかるべきである。

台湾の中原大学（Chung Yuan Christian University）大学院宗教学部で、グラウンデッド・セオリー・メソッド³⁴に基づき、教会カウンセリングの観点による心理カウンセリングの統合で問題になるテーマを抽出することを目的とした調査が行われた。教会カウンセリング・コースで学び且つ心理カウンセリングを受ける体験をした様々の教派的・教育的・職業的背景を持つキリスト者受講生20名が被験者となった。これによれば、キリスト者のクライアントには、セラピーにおいて信仰的対話への期待があり、聖書や祈り、赦しや悔い改めといったキリスト教の霊的源泉を柔軟に使用することが求められる。従って一般の心理カウンセラーには、キリスト教に精通し信仰問題についてオープンな対話ができるような多文化カウンセリングの力量が必要であり、それが果たされない場合には、最大限の共感的理解と共にリフェラルが求められる³⁵。

この例からも分かるように、危機カウンセリングや病者に関わる分業として世俗の対人援助活動の中に教会カウンセリングの存在意義を見出すだけでは、魂の配慮というキリスト教会に求められる機能を十分に果たしているとは言えない。教会カウンセリングにはキリスト教会固有の意味と手法が求められているのである。ここにおいて重要なことは、教会カウンセリングと心理療法の目的の根本的な相違を明確にすることであろう。

教会カウンセリングとは、霊的指導として、人間の十全性³⁶、すなわち、生ける神との交わりに連れ戻し、交わりを保持し、それを成長させるための形而上学的実践を、経験を基盤とした科学の一分野としての臨床心理学を援用して行うキリスト教会固有の働きである。赤坂泉は、聖書的信仰と価値観を土台とするキリスト教会の伝統の中に古来存在してきたものとして教会カウンセリングを位置づける³⁷。しかし、教会カウンセリングは事実上、現代の臨床心理学の影響下で生まれたと言わざるを得ない³⁸。現代社会の混迷の中で従来の教会では対応できなくなったこと³⁹、及び、心理学の高度な知見の台頭がその理由である⁴⁰。説教の延長上にあ

³⁴ 臨床心理学の調査法の一つで、数値化されない質的データに基づき、理論を構築するための手法。

³⁵ Pan, P. J. D., Deng, L. F., Tsai, S. L., Yuan, J. S. S., Issues of Integration in Psychological Counseling Practice from Pastoral Counseling Perspectives, *Journal of Psychology and Christianity*, vol. 32, No. 2, p. 146-159 (Christian Association for Psychological Studies, 2013).

³⁶ 樋口和彦、上掲論考、168-170頁。

³⁷ 赤坂泉「教会カウンセリングの確立のために——教会神学の構築——」『福音主義神学第33号』、日本福音主義学会発行、2002年、5-29頁。

³⁸ 樋口和彦、上掲論考、170頁。

³⁹ 有馬式夫『教会カウンセリング入門』、新教出版社、1996年、7-9頁、及び、三永恭平、上掲書、7-23頁。

⁴⁰ 三永恭平、上掲論文、134-135頁、及び、西垣二一、上掲書、71-72頁。

る宣教的牧会を補完するために聞くことを主眼とした奉仕的牧会を提唱するボンヘッファーは、霊性への無理解や倫理的な観点から心理学の応用には否定的である⁴¹。しかし、現代心理学におけるマインドフルネスの探求や心理学者の倫理性は、こうした批判に耐えうるものがある⁴²。人間の全体性の回復を目指す霊的指導においては、マインドフルネスを含む精緻な人間心理の理解、及び、世俗の心理学者の倫理性から学ぶことは有益である。

牧会は、罪の問題を人間の混乱の一つとして洞察し、心の病をも視野に入れている⁴³。しかし、牧会ないし霊的指導は、安易かつ機械的に相手の罪を指摘し、訓戒を与えるという上下の支配関係として機能する傾向があった⁴⁴。これは、人の心を支配し、一定方向にコントロールするカルト団体の手法と類比できよう。そういう事態とならないように、牧会ないし霊的指導において、臨床心理学の成果に裏打ちされた専門的な知見や技法及び倫理性から示唆を得ることは今後ますます重要になってくるであろう。

聖書解釈においても、心理学の知見は示唆深いものがある。歴史学的考察が聖書本文の分析を飛躍的に進展させ、聖書の多様な思想世界の理解へと大きく道を開いたことからわかるように、他分野の知見と相互対話的に向き合うことは、学問の進歩にとって破壊的であるどころか極めて建設的な方法でもある。従って、心理学の諸分野からの知見や諸成果も聖書理解を豊かにするためのツールとしても有効活用すべきである⁴⁵。このように心理学を牧会の補助学として援用することは、不可欠と言わないまでも、方法論的にはそれ自体妥当であると言わなければならない⁴⁶。ここに神学と心理学の統合的理解が要請される。

41 ボンヘッファー著、上掲書、237-289頁。

42 マリアン・コーリィ、ジェラルド・コーリィ共著、下山晴彦監訳、堀越勝・堀越あゆみ共訳『臨床心理学レクチャー心理援助の専門職になるために 臨床心理士・カウンセラー・PSW を目指す人の基本テキスト』（金剛出版、2005年二刷）、水野修次郎『よくわかるカウンセリング倫理』（河出書房新社、2005年）、同『カウンセラー必携 最新カウンセリング倫理ガイド—ACA倫理綱領対訳APA倫理綱領全文訳』（河出書房新社、2006年）、ラス・ハリス著、武藤崇監訳、武藤崇・岩淵デボラ・本多篤・寺田久美子・川島寛子共訳『よくわかるACT（アクセプタンス&コミットメント・セラピー）明日からつかえるACT入門』（星和書店、2012年）参照。

43 E.トゥルナイゼン、上掲書、276-321頁。

44 ラリー・クラブ著、今井敦子訳『教会の働きとカウンセリング』、いのちのことば社、1993年、62-65頁。

45 山口勝政「神学と心理学の接点の解釈について——聖書の統合主義の立場から——」『ジャーナル第9号』、2000年、25-36頁。G.タイセンは、原始キリスト教徒の体験した認知と行動の変容について解釈学的心理学の観点で記述を試みている（G.タイセン、渡辺康磨訳『パウロ神学の心理学的側面』、教文館、1990年）。

46 E.トゥルナイゼン、上掲書、注43。

4. 牧会と心理学的カウンセリングとの統合の問題

牧会と心理学の統合が不可欠である以上、何らかの「結合点」を想定することなく⁴⁷、いかにして両者を統合し、分かれず混同されない関係を保持するかが課題となる。牧会カウンセリングは、人間の肯定的側面を強調した人間性心理学の影響をより強く受けてきた。その代表者C. ロジャーズに由来するパーソンセンタード・カウンセリングは、「評価の座」を個人の「有機体的体験」に置くことを目標とし、無条件の肯定的配慮や共感的理解などをその変数とする⁴⁸。こうした人間性心理学の影響のもと、末期配慮やカウンセリングの経験を積み重ねてきた有馬式夫は、牧会カウンセリングの原理を、観察、ラポール、受容、傾聴、共感、支持、理解、対決をもって、転移、逆転移、沈黙、拒否、差別に対応することとした⁴⁹。しかし、これらはいずれも世俗のカウンセラーのなし得ることである。確かに、有馬のカウンセリング論は、神との応答的關係を目的とし、そのプロセスを、カタルシスから告白に、洞察から信仰に、そして人格的・霊的成長に至ることとする⁵⁰。しかしながら、実際は神の介入がどこで行われるのかが曖昧であり、牧会と心理カウンセリングの安易な折衷という印象はぬぐえない。有馬と同様、三永も、牧会カウンセリングを人間の霊的成長への欲求に答えるものと位置づける⁵¹。彼の場合、カウンセラーによる傾聴・共感・受容は神の無条件の愛とゆるしの代理とされ、自己洞察はキリストに支えられる自己認識と同一視される⁵²。ここでは、有機体的体験との自己一致が自動的に神との人格的呼応關係に至るとの楽観主義的な連続性が見られ、生ける神との交わりという出来事性と人間の欲求充足という科学的法則性との奇妙な混成があることは否めない。またこれらの技法の中には、たとえば傾聴のように、神の前に何事もし得ぬ罪人として空の手で立つことへの契機はあるものの、牧会者の一定の行為が神の愛の代理的執行という存在の類比を導き入れ、牧会がカルト化する危険さえある。これらには、トゥルナイゼンの言う人間の言葉の地平から神の言の山麓を隔てている溪谷（「断絶」）という暗闇への跳躍⁵³は考慮されていないということになるであろう。

技法に関わるもう一つの楽観主義がある。それは、人間の「あるがまま」を無条件の肯定的

⁴⁷ 同上、97-99頁。

⁴⁸ H. カウシェンバウム/V.L. ヘンダーソン編「二つの研究から学んだこと」伊藤博・村山正治監訳『ロジャーズ選集・上』、誠信書房、2002年、192-205頁、「価値に対する現代的アプローチ：成熟した人間における価値付けの過程」、同、206-227頁。デイブ・メアーズ 著、岡村達也・上嶋洋一共訳『パーソンセンタード・カウンセリングの実際——ロジャーズのアプローチの新たな展開——』（コスモスライブラリー、2000年）も参照。

⁴⁹ 有馬式夫、上掲書、6-164頁。

⁵⁰ 同上、166-191頁。

⁵¹ 三永恭平、上掲書、11頁。

⁵² 同上、214-215頁。

⁵³ E. トゥルナイゼン、上掲書、179頁。

配慮をもって受容することのみですべてをなし得るとする技法に関するものである。受容は強力な治療条件であり、心の深みにまで届いて変革を促すものであることに間違いはない。しかし、この技法は、「あるがまま」ということで膠着した思考・感情・自己概念によってクライアントの生活が支配されるリスクがあり、その使用は限定されるべきである。特に重篤な精神疾患やパーソナリティ障害などでは症状の悪化が懸念され、一般のセラピーとしても効果を疑われる。神学的な人間学においては、思考・感情・自己概念は罪の支配下にあるとみなされている肉に属しており、これら人間の本性をもって自力で神のもとに至る道は断たれていると考えられている。

スワード・ヒルトナー（1909-1984年）は、神学と心理学を相互的なダイナミズムの中でとらえ、両者の区別を解消する方向に近づく。ヒルトナーの一連の著作⁵⁴を翻訳した西垣によれば⁵⁵、ヒルトナーは機能主義に基づく神学の再構成を試み、牧会の神学を提唱する。神学の枠組みは、聖書から教義を読み取って引き出し、引き出された教義をもって実践を検証するという不可逆な方向性を持つ。それに対して、ヒルトナーは、理論から行動へという図式を、理論に適合しない状況を受け入れない「区画主義」と規定し、生身の人間存在の固有の状況に関わる行動から引き出された理論の構築も可とする双方向の「相互乗り入れ」的な営みに転換すべきだと主張する。要するに下からの道を可能と考えたのである。しかしながら聖霊の働きの中で聖書を通して語られる神の言は、人間が構築し所有できる「理論」であるというよりも、その都度なされる神の語りかけの出来事に他ならない。これらを理論であるかのごとく考え、実践との相補的な関係の中で発展していくものととらえること自体、超越から差し入れられる光によって生きる信仰の営みを理解していない証左であると言わざるを得ない。下からの道を可能にするならば、一体どのようにして「恩寵のみ」を堅持できるだろうか。神学を経験科学に解消しようとするヒルトナーの試みは、牧会を“shepherding”（＝「羊飼いが羊を守るように、牧会者または司牧者が人々に寄り添い、人々を守り導くこと」）という概念でとらえ直し、その内容を癒し（healing）、支え（sustaining）、導き（guiding）とすることにも表れている。ここにおいて、人間性の回復への関心が前景に押し出され、神人関係の回復は背景に退いてしまった感は否めない。

ポスト・ロジャーズを自認する上述のハワードJ.クラインベルは、ロジャーズ以来の牧会カウンセリングの手法が現場でもたらす諸問題の解決のために努力し、既存のカウンセリング・モデルを牧会に応用できるように修正したモデルを提案する⁵⁶。これは、牧会の状況に応じて、

⁵⁴ 『牧会の神学——ミニストリーとシェパードイングの理論——』（聖文舎、1975年）、及び、『牧会カウンセリング——キリスト教カウンセリングの原理と実際——』（日本基督教団出版局、1969年）。

⁵⁵ 西垣二一、上掲書、34-56頁。

⁵⁶ ハワード・J・クラインベル、上掲書、38-55頁。

縦横無尽・臨機応変に諸技法を使い分け、伝統的な牧会の四つの働き——癒し、支持、指導、和解——に統合しようとする理論である。修正ポイントは、柔軟な場面構成、指導、行動志向的な欲求充足の達成、意識・前意識のレベルへの目標設定という4項目である。しかしながら、欲求充足という人間学的関心から出発するという傾向には修正の手は及んでいない。このモデル案は、信仰義認の教説にあたかも神学的添え物のように言及しているにすぎず、牧師の個人の力量が変化をもたらす要因であるとする⁵⁷。

ファンダメンタルな神学の視点から非聖書的なものを排除し、キリスト教会の働きとして聖書と調和する心理学的カウンセリングのアプローチを試みたラリー・クラブは、心理療法の適用には異なる世界観が混入する危険性が伴うことを警告し、その一例としてエリック・バーンによって開発された交流分析を挙げる⁵⁸。精神分析を土台とし、人間性心理学を取り入れた交流分析は、その分かりやすさから米国で一世を風靡し、キリスト教会にも少なからず影響を与えた。しかしながら、そこでは義認の教説が肯定的人間観——“I am OK. You are OK.”——の根拠へと巧妙にすりかえた。こうした人間性に基盤を置く心理学が無批判に牧会に適用された背景には、ティリッヒの義認論の影響が想定される⁵⁹。ティリッヒは、精神医学用語「受容」(acceptance)を用いてパウロ的・ルター的信仰義認を、受容され得べからざる自己の受容を受容する勇気と再解釈する。ティリッヒは、これを「存在への勇気」と呼ぶ。しかし、これは結局、存在論的義認論から認識論的義認論へのすり替えではないだろうか。こうした人間の本性に対する肯定的な楽観論が、牧会と心理学の統合問題に関する安易さの底流にある。

しかし、心理学と信仰との混同を警告したラリー・クラブ自身の提唱する聖書的カウンセリングにも難点がある。ラリー・クラブによれば聖書的カウンセリングとはその目標を、人間主義的な自己実現ではなく、「主に似た者となる」「神の意志に従う」ことにあるとし、義認から栄化への成長を導くものとする⁶⁰。しかし、その成長の道筋は、聖書的カウンセリングの名によって法則化される危険性を孕んでいる。彼の提唱した聖書的カウンセリングは、形而上学と自然科学を混合した疑似科学のそしりを免れない。それは、「思いのまま吹く風の如き」聖霊の業（ヨハネ3:8）というよりも、人間の側で行う心の操作による人間の業である。また、その目標は「新しくされた考え方・見方」という「内なる性質」の形成ではあっても、日々更新される神との人格的な交わり（Ⅱコリント4:16参照）へと招き入れることではない。ラリー・クラブは、安全と意義を求める人間の欲求は神のみが満たしうるとする。それは正鵠を得ているが、その解決の仕方は人間主義的である。すなわち、人間は無意識に潜む誤謬に満ちた欲求

⁵⁷ 同上、56-77頁。

⁵⁸ ラリー・クラブ、上掲書、51-54頁。

⁵⁹ 西垣二一「教会史における牧会カウンセリングの歴史」『現代キリスト教カウンセリング第1巻』、日本基督教団出版局、2002年、36-54頁、及び、上掲書、57-58頁。

⁶⁰ ラリー・クラブ、上掲書、23-28頁。

充足というサタン的な基本前提に囚われているので、その解放のためにはこの基本前提を聖句——実際は、取捨選択された好みの聖句——で置き換えなければならないと言うのだ。スキーマや自動思考を入れ替える認知療法の聖書版とでも言うべき彼のカウンセリングの手法には、生ける神の業である恩寵の入り込む余地は微塵もない。ラリー・クラブの人格構造の概念を用いるならば、思考力（ヌース）が、サタン的な基本前提（プロノエマ）を拒否し、聖書の真理——実際は限定された聖句——で行動するために強い意志が要求される。これもまた無条件の救済という「恩寵」から逸脱した功績重視の律法主義の一例であり、キリスト教の救済観の基本原理である贖罪は考慮されているとは言い難い。彼のカウンセリング手法には、マックス・ウェーバーが提示した資本主義行動規範としてのプロセスタンティズムの影を強く感じないわけにはいかない⁶¹。

西垣二一も、牧会カウンセリングにおける聖書の使用に関して考察を加えている。牧会学を専門とする神学者ウィリアム・オーグルスビーの研究『牧会的配慮に適合する聖書の諸主題』を紹介し、聖書の道徳的使用ではなく、神との交わりの回復と和解を目指す聖書の行動科学的考察に言及する⁶²。しかし、それは神の言を内に宿す「土の器」としての自己ではなく、愛の告知による自己重視ないしは自己肯定感の高揚に寄与するに過ぎないとすれば、結局、楽観的な人間主義に道を譲ることに変わらない。アジアの異教的文化における牧会カウンセリングで使用すべき聖句として提案されている内容も、贖罪の原理に依拠せず、人間主義的である。

先に述べたように、牧会は神との人格的呼応関係に導くことであり、人間の力の及ばぬことに向き合う業として、祈り、聖書への沈潜、及び、霊的指導であり⁶³、二人の人間が共に神の語りかけに耳を傾ける「それ自身において祈りになるような聞き方」でなければならない⁶⁴。従って心理学は、人間の限界内にとどまることとしての霊的指導の中に位置づけられることも最もふさわしい。しかしながらこれまで展望してきたように、従来の牧会カウンセリングがこの点において成功してきたとは言い難い。むしろ世俗の心理学の中にこそ、そのような自己抑制を重視する理論と実践があることにわれわれは謙虚に襟を正さなければならないのではないだろうか。西垣二一は、カウンセリングの宗教モデルとしてユングの分析心理学を取り上げ、河合隼雄が指摘した「奇跡としか思えない」体験のあることを紹介しつつ、「治療意志の放棄」を理論に組み入れる⁶⁵。心理学は、罪の赦しと使命への召し出しを代行・代弁することはできない。そこからは聖書読書と祈り及び神の業の証人となることに道を譲らなければならないのである。

61 ウィリモン、上掲書、257-258頁。

62 西垣二一、上掲書、127-128頁。

63 E.H. ピーターソン、上掲書。

64 同上、158頁。

65 西垣二一、上掲書、注31、170頁。

先に述べたように牧会カウンセリングは、生ける神との交わりに人々を招き入れるために、心理学の諸成果を補助的に用いる試みであるが、この業の主体はあくまで神であり、神が語るという出来事を人間の側の全たき欠損の中で、しかし確固たる信仰の中で、待望すること以上に出ることはできない。そのことを自覚する霊的指導として、牧会カウンセリングは、治療意志の放棄、空虚化、謙遜、透明化などの語に示される態度をその手法の中に引き入れる必要があるであろう。しかし従来の牧会カウンセリングではこの課題を十全に果たしてきたとは言い難い。ここに新しい統合の在り方が神学的に考察されなければならない。では、心理学と牧会学との、混同されず分離されない統合の理論とはいかなるものであるべきであろうか。

5. 牧会と心理学の統合の理論

神学的な牧会実践の目的は、主権の交替——悪しき言葉の支配から神の言の下に人間の全体性を取り戻すこと——であり、それは贖罪論に基礎づけられる⁶⁶。これに沿う心理学の応用はどのような形でなされるべきであろうか。ラリー・クラブは、牧会カウンセリングと心理学との統合の方法として、啓示と調和する心理学の理論のみを受け入れるという方針を立てる⁶⁷。しかし、形而上学と自然科学という異次元にあるものを同次元において一方的に裁断することは方法論的に問題なしとはしない。さらに、彼の言う啓示とは逐語靈感説に立った字義通りの聖句そのもののことであり、聖書解釈が多様化する中で、彼の言う「調和」の是非は見極めがたい。本稿では統合の方法を以下の前提に基づいて提案する。聖書の創造理解及び人間観によれば、神は被造物を用いることを人間に委ねたと理解される。その中には自然科学が発見した諸法則も含まれる。そういう意味では、キリスト教が欧米の科学の発達の基盤と言っても過言ではない。ただし、自然科学を神格化し、その法則を絶対不変の真理とすることまで、人間に委ねられているわけではない。その委託の守備範囲は、神の主権——自然法則に関与し凌駕する神の人格的な働き——に対して、服従をもって応ずる信仰の枠組みを踏み越えることはできない。被造物を相対化する霊的洞察は、イグナチウスの『靈操』における「根本原理」に学ぶところが大きい⁶⁸。この前提に立つ統合の方法とは、信仰の類比（*analogia fidei*）のそれにならない⁶⁹。それは、祈りと畏れをもって、「悔い改めの呼びかけ」⁷⁰として道備えを為す霊的

⁶⁶ E.トゥルナイゼン、上掲書、364-434頁。

⁶⁷ ラリー・クラブ、上掲書、65-81頁。

⁶⁸ 『聖イグナチオ・デ・ロヨラ 靈操』（注19）。

⁶⁹ 吉永正義訳「知解を求める信仰——アンセルムスの神の存在の証明」『カール・バルト著作集8』、新教出版社、1983年。カール・バルトによれば、神学的命題の証明において人間の為す認識の必然性と存在的ラチオ性の探求は、類比的、思弁的な理解に過ぎず(219頁)、啓示がなければ、それ自体では無であり、知解へと至ることができない未完結の弁証法的理解である(32-33頁、219-220頁)。

⁷⁰ E.トゥルナイゼン、上掲書、220-248頁。

指導の方法である。この霊的指導においては、牧会者自身及び牧会者自らが用いる心理学的法則と技法が、神の癒しの業（贖罪とその告知）とは似ても似つかぬものであり、神の業にとって妨げでしかないものであることを自覚しつつも、神が用い給うことを大胆に信じつつ、一切を神に委ねるといった信仰のあり方が問われる。以上を前提として、牧会カウンセリングにおけるACT応用の可能性に関する考察が可能となる。

6. 牧会カウンセリングにおけるACT応用の可能性

認知行動療法に次ぐ第三世代の行動療法と言われるACTは、関係フレーム理論⁷¹に基づく心理療法であり、治療効果が高く適用範囲も広い⁷²セラピーとして注目されるようになってきた。はじめにラス・ハリスの指導書⁷³に基づきACTを概観した上で、牧会への応用の是非を牧会の本質並びに聖書の使信と照らして論じる。

ACTは、“Acceptance and Commitment Therapy”の略語であるが、これは、変えられないことを受け入れ、変えられることに関わるという意味で命名された。ここにはキリスト教倫理学の大家で、今なお米国の政治思想や社会の各方面に深い影響を与え続けているラインホルド・ニーバー（1892-1971年）の祈り⁷⁴を想起させるものがある。このセラピーは生きがいのある生活を目指し、その生活に伴わざるを得ない苦痛やストレスに効果的に対処できる方法を学ぶことを目的とする。端的に言えば、思い煩いを手放し、価値を追求する生活が目指されるということである。ACTではこれを「心理的柔軟性」の概念で総括する⁷⁵。

ACTにおいては心理的柔軟性に向かうために6つのコア・プロセス——認知的脱フュージョン、アクセプタンス、「今ここ」との接触、文脈としての自己、価値、コミットされた行動——がターゲットとされる。この図示は「ヘキサフレックス」と呼ばれる（次頁図参照）。6つのコア・プロセスは、単独に働くのではなく、互いに密接に絡み合いながら作用する。

「脱フュージョン」とは、思考への囚われ——認知的フュージョン——から自由になること

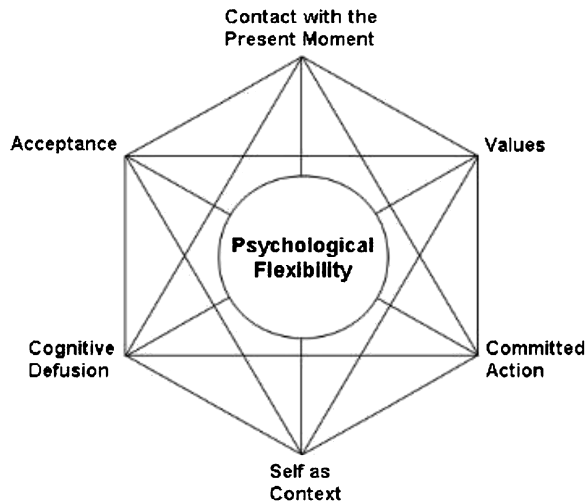
⁷¹ ニコラス・トールネケ著、山本淳一監修、武藤崇・熊野宏昭監訳『関係フレーム理論（RFT）をまなぶ：言語行動理論・ACT（アクセプタンス&コミットメント・セラピー）入門』（星和書店、2013年）参照。

⁷² ラス・ハリス、上掲書、注42、49頁。

⁷³ 同上、注42。

⁷⁴ 「神よ、変えることのできるものについて、それを変えるだけの勇気をわれらに与えたまえ。変えることのできないものについては、それを受け入れるだけの冷静さを与えたまえ。そして、変えることのできるものと、変えることのできないものとを、識別する知恵を与えたまえ」（大木英夫訳）。これは、1943年夏、マサチューセッツ州西部の山村の小さなキリスト教会において説教した際の祈りとされている。

⁷⁵ ラス・ハリス、上掲書、15-18頁、112頁。



である。それは、思考をなくそうとすることではなく、思考が正しくとも誤りであってもその真偽によって行動するのではなく、思考から自分を切り離し、思考をそのままにしておきながら、有効性(workability)に基づいて行動できるようになることである。脱フュージョンのためには、思考が現実的体験ではなく、言葉やイメージであるところの単なるシンボルであり道具であることを理解することが必要になる。「アクセプタンス」とは、苦痛な感情や感覚を避けたり、抵抗したり、取り除こうとしたりすること——苦痛の回避、コントロール・アジェンダ——が有効ではないという認識——創造的絶望——に導かれ、苦痛をありのままにしておく心理的空間をつくることである。「『今ここ』との接触」とは、過去や未来の、あるいはその他の自動思考——意識を介さず瞬時に自動的に浮かんでくる思考やイメージ——に埋没するのではなく、意識が「今ここ」の事物に集中している状態を指す。その意識状態に入るためには、自分の「私的な」行動と「公的な」行動の両方に柔軟に意識を向けなければならない⁷⁶。「文脈としての自己」(「文脈自己」と略記)とは、「観察する自己(「観察自己」と略記)」「純粋な気づき」とも呼ばれ、考える自己と区別された純粋な自己意識である。この自己意識は、感覚・思考・感情などに対する観察の起点であり、同時にこれらが活動する心理的空間である。文脈自己は厳密にはマインドの一部であるが、それ自体考えることをしないためにマインドとは区別されて用いられることが多い。これは、生涯変わることなく一貫した自己であり、苦痛や感情の嵐が吹き荒れても精神的痛手を負うことがない。それはあたかも嵐を内に抱える青空のメタファーのように広々とした安全な空間である。「価値」とは、観念ではなく、また人生の目標でもなく、「今ここ」にある観察する自己がその都度選択する人生の方向性を示す言明(statement)である。

⁷⁶ 行動心理学では、外部から観察可能な行動を「公的な」行動と言い、外部からは観察不能な行動、つまり脳内の思考や感情や感覚の動きのことを「私的な」行動と言う。

この価値との接触により、人生に意味と生きがいを与えられる。価値との接触は本来出来事としての性格を持つものであるが、価値はそれを固く保持しようとすることで容易に概念（マインド）化し法則性を帯びる。そのために逆にそれに縛られること（フュージョン）が起こるので要注意である⁷⁷。「コミットされた行動」とは、価値に導かれ、動機づけられながら効果的な行動をとること、またそうした行動のパターンを作ることを意味する。

ACTが目標とする「心理的柔軟性」は以上6つのコア・プロセスを総称する概念である。即ち心理的柔軟性とは「今ここ」にある自己がアクセプタンスや脱フュージョンによって思考や感情をオープンにしつつ、価値ある行動にコミットすることである。

この目的のためにACTが用いるのは、「マインドフルネス」スキルと「価値の明確化」の二つである。マインドフルネスとは、「今ここ」という場で「観察する自己」から、自己の内外の一点にも全体にも、苦にも快にも、オープンかつ柔軟で好奇心を持った「注意」を向けている意識状態である。一定のスキルを用いてこの意識状態に入ることにより、苦痛となる思考や感情を軽減・消去しようとするコントロールを手放し、それらに効果的に対処することができるようになる。そして不適切な行動に駆り立てられたり心理的にも生活全般にも害を受けたりしなくて済むようになる。価値とは、未来のある時点で実現することを目指す「目標」とは区別されたもので、絶えず「今ここ」という場で完全に成就できるものであり、意志によって選択されたものである。クライアントはこの価値の明確化によって自らの生活を変えるべく行動する。ACTは、「マインド」に翻弄されることから距離を保つことを目指すので、話し合いよりも「今ここ」という直接体験を重視する。従って、体験的スキルのエクササイズやメタファーが多用される。

次にACTが牧会カウンセリングの前提に対してどの程度適合性があるかを検討する。ACTは、思考や感情の影響を最小限にして価値に基づいて行動できる心理的柔軟性をセラピーの目標とする⁷⁸。即ち、自己概念が支えられること⁷⁹ではなく、自己概念そのものからの解放、オープンでいられること、「今ここ」にいるという観察自己の視点を持つこと、及び、価値に生きることが目標となる。ここで検討するのは、ACTの目標が自己抑制を伴う霊的指導としての牧会の方法にどの程度適合的かということである。牧会者がACTを用いる場合、第一に、罪の結果としての苦痛に対して、人は何事も為しえないという自己義認への絶望を促すために、ACTの「創造的絶望」——回避やコントロール戦略のアジェンダに絶望することを通して、新たな対処法の可能性に思いが向かうことへの契機となること——を用いることができる。第二に牧会者は、赦しを待ち望みつつ苦痛をそのままにしておくことを来談者に求めるが、ここ

⁷⁷ ラス・ハリス、上掲書、注42、331頁。

⁷⁸ 同上、15-18頁、112頁。

⁷⁹ 三永恭平、上掲書、214頁。

でACTにおける、オープンにしておくこと、すなわち、「アクセプタンス」と「脱フュージョン」を促すことが役に立つであろう。第三に、牧会においては「空虚化」（カルヴァン）された者、ないし「謙遜」（バルト）にされた者、あるいは「透明化」（ティリッヒ）された者⁸⁰として、「今ここ」という場で人生の意味が与えられることをひたすら待ち望む（フィリピ2:13参照）ことを教えることになるが、そこではACTの「観察自己」ないし「文脈自己」の導入が適用可能である。また、牧会者自身も何事も為しえぬ者として、マインドフルに空の手で傍らに立ち尽くすことに徹することになる。神人関係の回復を目指す牧会に置いて、ACTのヘキサフレックスに基づくトレーニングは、「主の道を備える」（マタイ3:3他）働きとして有効であると考えられる。牧会においてACTにできることはここまでである。さらなる前進、すなわち、義認のためには、罪と苦悩のキリストによる引き受け並びに使命の授与と派遣が、心理学的法則性の限界を超えて、生ける神との出会いの出来事として生起しなければならない。ここに人間の側から「結合点」を設定する領海侵犯に手を染めない、節度のある臨床心理学の知見と技法としてACTを用いる正当性の根拠があると仮定する。

最後に、ACTの聖書の使信そのものとの親和性を論じる。取り上げる聖書箇所はマタイによる福音書6章25-34節である。聖書解釈にはルツの注解書⁸¹を参照する。当該聖句からは三つのモチーフ、「思い悩むな」、「現在（プレゼンス）せよ」、「神の国と神の義を求めよ」を抽出できる。第一の「思い悩むな」は、イエスに由来する放浪のラディカリストに向けられた原資料で、生活への配慮と実存的苦悩を父としての人格的神の手に委ねる信仰を勧める。生活苦や不安／無意味感があることが問題なのではなく、その苦痛を回避／解消のために為す自己保身や自己義認の行動が問題とされる。放浪のラディカリストの支持者を含む教団全体のために付加された三つの知恵文学的勧告には二つのモチーフ——悲観主義的諦念と楽観主義的現在への集中——が読み取れる。悲観主義的諦念は、苦痛の回避／解消の行動を戒める根拠である。楽観主義的現在への集中、即ち第二の「現在せよ」は、知恵文学的付加部分にのみ見られるモチーフである。これは無責任な刹那主義ではなく、「今ここ」における神との人格的出会いと交わりを約束し、この約束に身を委ねる勇氣ある敢行の勧めである。第三の「神の国と神の義を求めよ」は、原資料にある「神の国」とマタイによる付加部分「神の義」からなる。マタイは信仰義認の中で愛の業を説くことに腐心した。即ち、神の支配を求め、その到来を信じて為す行いの勧めである。

以上の使信はACTの6つのコア・プロセスの観点で以下のように言い換えることができる。信仰者の生活は、苦痛の回避や解消のために自己保身や自己義認に手を伸ばすことなく、

⁸⁰ 手束正昭、上掲論文、注27。

⁸¹ ウルリヒ・ルツ著、小河陽訳『EKK新約聖書注解I/1：マタイによる福音書（1-7章）』、教文館、1990年、519-538頁。

これらを神の手の中に置くことである。湧いてくる感情や思考のコントロールは短期的には効果があっても長期的には不可能であることを認め——創造的絶望——、不快な感情をアクセプトし不適切な思考から脱フュージョンすることは、それらの苦痛や悪しき思いが、自らの力では如何ともし難いものであることを認め、あるがままにしておき、神の取り扱いを待ち望む備えに通じる。信仰者の生活は、「今ここ」における神との人格的な出会いと交わりであり、神の言に聴従し、神の言の宿る器となることである。「今ここの接触」は、現に生きて働いておられる神との接触の備えをする。また自己を「文脈自己」ないし「観察自己」として規定することで、神の言を宿すべき「空の器」として待ち受ける構えを作ることができる。信仰者の生活は、神の国と神の義を求めること、「御国を来たらせたまえ」と祈りつつ、「御心を地にもなさせたまえ」と祈り行動することである。それは予め自らの思想（マインド）によって定めた価値観ではなく、その場その時に出来事として賦与される神の言葉を自らの価値ないしは使命への派遣命令として行動するコミットメントである。

以上より6つのコア・プロセスは、罪の結果である苦痛や悪しき考えをキリストの贖罪の手の中に受け入れていただき、今ここで出会ってくださる神を空の器として待ち受け、その器の中に日々新しく盛られる神の言によって行動する、キリスト者の生活を備えるために用いることができる。

ACTの限界——法則性の問題——

ACTが価値に注目するのは、臨床行動分析において個人に特有なものであると考えられる価値が望ましい行動の重要な指針として要請されたからである⁸²。この場合の価値は、何らかの道徳的社会的規範のもとにある価値ではなく極めて個人的な価値である。それはまた、マインドの中に記憶として保持しておけるようなものではない。なぜ価値が健康な行動を促すのかは、理論的説明が不可能な経験則に基づく「神秘的」な事実であり、「今ここ」で出来事としてクライアントの自己が見出す他ない性質のものである。ACTにおいては、このような価値は、クライアントが自らの心の奥底を深く吟味することにより見出すことが期待される⁸³。しかし、それは信仰においては、「今ここ」にいるという瞬間に神が個人に直接に与えるものである。それが何人も立ち入ることのできないことを牧会者は熟知している⁸⁴。ACTによるセラピーにおいては、先に述べたように、価値が容易に概念化し法則性を帯びるリスクに対する警戒を怠

⁸² 坂野朝子・武藤崇『『価値』の機能とは何か：実証に基づく価値研究についての展望』『心理臨床科学2(1)』（2012）、69-80頁。

⁸³ ラス・ハリス、上掲書、73頁、332-333頁。

⁸⁴ 戸田伊助、上掲論考。

ることはできない。神学的表現で言えば、価値は、人間を束縛する一種の律法となる恐れがある。価値は恵みとして与えられるものであり、その賦与は信仰生活の圏外でも生起する。しかし、神の賦与を知る牧会者は、価値に対してセラピストよりもより慎重に事を進めざるを得ない。牧会者は人々の中に上述の「キリストの形成」を観察する特権を与えられるが、あらかじめその道を知ることはできないからである⁸⁵。人は結局独りで歩み、独りで神の前に立たなければならないのだ。牧会者は自らの無為にとどまることを心得ていなければならない。

罪の赦しについても同様である。ACTが為しうることは、不適応な硬直した思考と苦痛となる感情をオープンな状態にしておくことにとどまる。一旦脳内にこうした思考や感情をもたらすシナプス結合がなされた場合、それを消去することは、中枢神経の損傷や手術による以外に全く不可能だからである。しかし、牧会の場合、神から離反した状態を指す罪とその結果である苦悩は、キリストとの人格的な関わりの中でキリストの手の中に移されるといふ実体的変化が起こる。これは、トゥルナイゼンの言う「主権の交代」、「悪魔の克服」であり、ボンヘッファーの言う「罪の克服」であって、アクセプタンスの概念で単純に言い尽くし得るものではない。

自己もまた空の器としての観察自己ないし文脈自己で終始することはできないであろう。自己は、神の言の方からの働きかけが生起するまで、その空の部分を満たされることを渴望してやまない魂だからである。こうした生ける神との交わりは、ACTが踏み越えてはならない限界点である。ACTのみで生きる生活にはある種の重苦しさが伴い、神と共に歩む生活にはある種の軽やかさが伴う。

まとめと課題

牧会とは、神の言を人が聴き得るようにすることであり、そのことを通して生ける神との交わりに連れ戻し、その魂を支え、守り、成長させることである。牧会とは、個人に起こる神の業の証人となるという自己抑制的なあり方としての霊的指導である。牧会カウンセリングとは、心理学を用いて牧会を行うことであり、両者が適切に統合されるためには、信仰の類比、すなわち被造物の中における神の臨在と働きかけを、被造物自体の本姓によってではなく、信仰によって知覚する方法を適用する。従って、牧会における心理学の応用には、謙虚さと共に、祈りと畏れが求められる。

一方、行動心理学から発達したACTが図式化する6つのコア・プロセスは、牧会の実践においても有益である。なぜなら、ACTは、人間の苦痛や不適切な考えをキリストの贖罪に引き

⁸⁵ E. H. ピーターソン、上掲書。

渡し、空になった自己として生ける神の人格的な語りかけを待望し、神の言葉によって行動する生活を備えるために用いることができるからである。しかし、主体と主権は常に、終始働きかける神の側にあり、心理学はそのことに立ち入ることはできない。

牧会における心理療法の応用に関する考察は、本稿では理論的な論究にとどまっている。具体的な実践の場面でどのように行われるかは今後の課題である。キリストのイメージの出現など予期せぬ出来事がクライアントの中に起こり癒しをもたらすことがあるが、こうした事例の報告も重要であろう。ACTの場合、特定のプロトコルが考案されているが、これをどのように牧会の枠組みの中に位置づけていくかも今後の検討課題となるであろう。これに加えて、教会員（クライアント）との関係などの牧会者の倫理問題も検討されねばならない。それは、神学的な要請であるだけでなく、社会的要請でもあり、また、カウンセリング理論そのものからも要請されると言えよう。

引用文献（著者名アルファベット順）

- 本稿の引用文献には、現場の教会の声も反映させた資料も含まれている。
赤坂泉「牧会カウンセリングの確立のために——牧会神学の構築——」『福音主義神学第33号』、日本福音主義学会発行、2002年、5-29頁。
有馬式夫『牧会カウンセリング入門』、新教出版社、1996年。
Barth, Karl, "Die Gemeinde für die Welt," in *Die Kirchliche Dogmatik. Vierter Band: Die Lehre von der Versöhnung*, Zürich: Theologischer Verlag, 1959, s. 872-910 (カール・バルト著、井上良雄訳『教会教義学：和解論』(IV/3)、新教出版社、2009年)。
Barth, Karl, *Fides quaerens intellectum: Anselms Beweis der Existenz Gottes im Zusammenhang seines theologischen Programms, Karl Barth-Gesamtausgabe Abt. II, Bd. 13*, Zürich: Theologischer Verlag, 1931, 2.Aufl., 1986 (カール・バルト著、吉永正義訳『知解を求める信仰——アンセルムスの神の存在の証明』、新教出版社、2015年)。
Bonhoeffer, D., *Finkenwalder Homiletik: Halbsjahrs-Seminar-Vorlesung zwischen 1935 und 1939. Rekonstruktion aus Nachschriften von Vikaren*, hrsg. von E. Bethge, München: Chr. Kaiser Verlag, 1975, s.237-289; *Seelsorge*, s. 363-414 (ボンヘッファー著、森野善右衛門訳『説教と牧会』、新教出版社、1975年)。
Clinebell, H. J., *Basic Types of Pastoral Counseling*, Nashville: Abingdon Press, 1966 (ハワード・J・クラインベル著、佐藤陽二訳『牧会カウンセリングの基礎理論と実際』、聖文舎、1980年)。
Corey, M. S. & Corey, G., *Becoming A Helper. Third Edition*, Boston: Books/Cole Publication Company, 1998 (マリアン・コーリイ、ジェラルド・コーリイ共著、下山晴彦監訳、堀越勝・堀越あゆみ共訳『臨床心理学レクチャー心理援助の専門職になるために 臨床心理士・カウンセラー・PSWを目指す人の基本テキスト』、金剛出版、2005年二刷)。
Crabb, L., *Effective Biblical Counseling*, Grand Rapids: The Zondervan Corporation, 1977 (ラリー・クラブ著、今井敦子訳『教会の働きとカウンセリング』、いのちのことば社、1993年)。
Fleming, D. L., S.J., *Draw Me into Your Friendship: A Literal Translation and A Contemporary Reading of the Spiritual Exercises*, Saint Louis: The Institute of Jesuit Sources, 1996。
Harris Russ and Hayes Steven C., *ACT Made Simple: An Easy-To-Read Primer on Acceptance and Commitment Therapy*, Oakland: New Harbinger Publication, 2009 (ラス・ハリス著、武藤崇監訳、武藤崇・岩淵デボラ・本多篤・寺田久美子・川島寛子共訳『よくわかるACT (アクセプタンス&コミットメント・セラピー) 明日からつかえるACT入門』、星和書店、2012年)。
Seward Hiltner, *Preface to Pastoral Theology*, Abingdon Press, 1979 (『牧会の神学——ミニストリーとシェパードの理論——』、聖文舎、1975年)。

- Id., *Pastoral Counseling*, Abingdon Press, 1949（『教会カウンセリング——キリスト教カウンセリングの原理と実際——』、日本基督教団出版局、1969年）。
- 樋口和彦「牧会学」『総説実践神学』（神田健次、関田寛雄、森野善右衛門編）、日本基督教団出版局、1989年。
- Ignatius, of Loyola, Saint, *Exercitia spiritualia*（ホセ・ミゲル・バラ訳『聖イグナチオ・デ・ロヨラ 霊操』、新世社、1997年）。
- 小林純一、三永恭平、山口実、齋藤友紀雄『神学と精神医学の間・第2集』、聖文舎、1979年。
- 窪寺俊之「教会カウンセリングの新たな可能性を探る」『福音主義神学第33号』、日本福音主義学会発行、2002年。
- Luz, U., *Evangelisch-Katholischer Kommentar zum Neuen Testament I/1*, Benziger Verlag und Neukirchener Verlag, 1984, s.367-375（ウルリヒ・ルツ著、小河陽訳『EKK新約聖書注解I/1：マタイによる福音書（1-7章）』、教文館、1990年）。
- Mearns, D., *Developing Person-Centered Counselling*, London; Sage Publications, 1994（デイブ・メアーンズ著、岡村達也・上嶋洋一共訳『パーソンセンタード・カウンセリングの実際——ロジャーズのアプローチの新たな展開——』、コスモスライブラリー、2000年）。
- 水野修次郎『よくわかるカウンセリング倫理』、河出書房新社、2005年。
- 水野修次郎『カウンセラー必携 最新カウンセリング倫理ガイド——ACA倫理綱領対訳APA倫理綱領全文訳』、河出書房新社、2006年。
- 三永恭平『こころを聴く——教会カウンセリング読本』、日本基督教団出版局、1986年。
- 三永恭平「魂への配慮といやしの歴史的展望」『心の病とその救い』（富坂キリスト教センター編）、新教出版社、1991年。
- 三永恭平「教会カウンセリングとは何か」『現代キリスト教カウンセリング第1巻』、日本基督教団出版局、2002年。
- 西垣二一『教会カウンセリングをめぐる諸問題』、キリスト教新聞社、2000年。
- 西垣二一「教会史における教会カウンセリングの歴史」『現代キリスト教カウンセリング第1巻』、日本基督教団出版局、2002年。
- Oates, W. E., *The Christian Pastor*. Philadelphia: The Westminster Press, 1964（W. E. オーツ著、近藤裕訳『現代牧師論——牧会心理学序説——』、ヨルダン社、1968年）。
- Pan, P. J. D., Deng, L. F., Tsai, S. L., Yuan, J. S. S., “Issues of Integration in Psychological Counseling Practice from Pastoral Counseling Perspectives”, in *Journal of Psychology and Christianity*, vol. 32, No. 2, p. 146-159, Christian Association for Psychological Studies, 2013.
- Peterson, E. H., *Working the Angles: The Shape of Pastoral Integrity*, Grand Rapids: Michigan, Eerdmans Publishing Co., 1993（E.H. ピーターソン著、越川弘英訳『牧会者の神学——祈り・聖書理解・霊的導き』、日本基督教団出版局、2011年）。
- Rogers, C. R., “Ellen West—and Loneliness,” in *Review of Existential Psychology and Psychiatry*, 1(2), Washington, etc., Association of Existential Psychology and Psychiatry, May 1961, pp. 94-101（H. カウシェンバウム/V.L. ヘンダーソン編、「二つの研究から学んだこと」伊藤博・村山正治監訳『ロジャーズ選集・上』、誠信書房、2002年、192-205頁）。
- Rogers, C. R., “Toward a Modern Approach to Values: The Valuing Process in the Mature Person,” in *Journal of Abnormal and Social Psychology* 68(2), American Psychological Association, 1964, pp.160-167（「価値に対する現代的アプローチ：成熟した人間における価値付けの過程」、前掲書、206-227頁）。
- 才藤千津子「1980年代以降におけるプロテスタント牧会神学——3つのアプローチ——」『同志社女子大学総合文化研究所紀要』、第30巻、2013年、63-76頁。
- 齋藤友紀雄「精神の危機と教会」（富坂キリスト教センター編、上掲書、117-137頁）。
- 白戸清「お互いに『教会』を必要としている者」『福音と世界』（2004年7月号）、新教出版社、26-31頁。
- 坂野朝子・武藤崇「『価値』の機能とは何か：実証に基づく価値研究についての展望」『心理臨床科学 2(1)』（2012）、69-80頁。
- 園田順一「ACTとは何か」『吉備国際大学臨床心理士相談研究所紀要』、第7号、2010年、45-50頁。
- Theissen, G., “Psychologische Aspekte paulinischer Theologie” Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1983

- (ゲルト・タイセン著、渡辺康磨訳『パウロ神学の心理学的側面』、教文館、1990年)。
- Torneke, N., *Learning RFT: An Introduction to Relational Frame Theory and Its Clinical Application*, Oakland: New Harbinger Publication, 2010(ニコラス・トールネケ著、山本淳一監修、武藤崇・熊野宏昭監訳『関係フレーム理論(RFT)をまなぶ:言語行動理論・ACT(アクセプタンス&コミットメント・セラピー)入門』、星和書店、2013年)。
- 手束正昭「パウロ・ティリヒの義認論——その今日的意義」『神学研究第20号』、関西学院大学神学研究会発行、1972年、135-162頁。
- Thurneysen E., *Die Lehre vom der Seelsorge*, Zürich: Theologischer Verlag, 1948 (E.トウルナイゼン著、加藤常昭訳『牧会学——慰めの対話』、日本基督教団出版部、1961年再版、249-275頁)。
- 戸田伊助「『牧会』か『牧魂』か」、上掲雑誌(『福音と世界7月号』)16-21頁。
- Willimon, W. H., Pastor: *The theology and Practice of Ordained Ministry*, Nashville: Abingdon Press, 2002 (W. H. ウィリモン著、越川弘英・坂本清音共訳『牧師—その神学と実践』、新教出版社、2007年)。
- 山口勝政「神学と心理学の接点の解釈について——聖書的統合主義の立場から——」『ジャーナル第9号』、2000年、25-36頁。
- 山元眞「バリアフリーの教会を目指して——キリストを模範に教会の形を整える——」、上掲雑誌(『福音と世界7月号』)、32-35頁。
- 山本将信「信徒と牧師の対話 悪霊につかれたゲラサ人をめぐって」(富坂キリスト教センター編、上掲書、161-183頁)。
- 山野繁子「会衆と共に旅する者として」、上掲雑誌(『福音と世界7月号』)、22-25頁。

(2016年4月5日受領、2016年5月10日受理)

(Received April 5, 2016; Accepted May 10, 2016)

An Essay on the Application of ACT to Pastoral Counseling

Fumihiko HAYASAKA

This essay reviews definitions of pastoral care and pastoral counseling to answer the long pending problem of integration of psychology into pastoral practice, and then tries to propose a theory of integration of psychological practice into pastoral counseling. This also considers the validity of using ACT (Acceptance and Commitment Therapy) as one of the methods of pastoral counseling.

Pastoral care is one of the ministries which serves to let individuals listen to the word of God. Through this work people are brought back to the fellowship with God, and their souls are supported, protected and nurtured. Pastoral care implies spiritual direction in which pastors with self-inhibition become witnesses of the God's work. Pastoral counseling is pastoral care that uses psychology, and its validity is ensured by 'analogia fidei'. 'Analogia fidei' is a method of knowing God's presence and activity within creatures by way of faith, not by way of the nature of the creatures themselves. The integration of pastoral care and psychology is done properly and successfully when 'analogia fidei' is applied. Therefore, it is with humility and with awe that we would use psychology for the purpose of pastoral practice praying for God's approval.

ACT, which was developed from behavior psychology, is applicable and useful to pastoral practice. Its 6 core processes can be used to prepare a Christian lifestyle, surrendering one's distress and inappropriate thoughts to the redemption of Christ, remaining to be a vacant self who longs for God's personal accosting, and committing to action in obedience to His Word. However, the subject and sovereignty always rest in God, and human actions cannot trespass upon the sovereignty, whether the activity is pastoral or psychological.